

石巻復興 NEWS

石巻専修大学経営学部 丸岡ゼミ 平成 27 年 11 月 30 日発行 第 41 号

日本エコミュージアム研究会全国大会 ～石巻でまち歩きとマップ作成～

11 月 14 日（土）、15 日（日）、石巻市で日本エコミュージアム研究会全国大会（会長＝吉兼秀夫阪南大学教授）が開催されました。14 日は雨の中、JR 石巻駅から復興まちづくり情報交流館まで約 40 名が下記の A、B コースに分かれ約 2 時間半のまち歩き、15 日は石巻専修大学でやはり約 2 時間半、会長講演と前日のまち歩きを振り返りながらのマップ作成ワークショップを行いました。参加学生の気付きをレポートから抜粋して紹介します。

A コース概要

◇JR 石巻駅前～石巻市観光課～萬楽堂～かめ七呉服店～復興まちづくり情報交流館

私は A グループで石巻観光課・萬楽堂・かめ七呉服店・復興まちづくり交流館を回り、主に震災の経験やその後の石巻の復興についての話を聞いてきました。まず石巻観光課では石森秀利さんから震災当時の話を聞きました。

石森さんの話で自分が一番印象に残った話は震災後の一番最初の仕事が道路の整備だったという話でした。震災後石巻市内の道路は倒れたり流されたりした家などで車が入れる状況ではなく道路をふさいだ家を片付けるのが最初にやることだったそうです。しかしその家には持ち主の大事なものなどが残っており連絡が取れる人には電話をかけたりして大事なものを回収して貰ったそうですが連絡がつかない人もたくさんいたと思います。連絡が取れない人の家はそのまま瓦礫として片付けられてしまうと聞いて沢山の人の思いが一瞬でゴミのようになってしまったと感じました。

萬楽堂では高橋美江さんの話を聞きました。100 年続くパン屋さん萬楽堂は、震災後お店を再開したが津波などがきにくい内陸の方に人が移動してしまいお客さんが減ったと言っていました。しかし津波でなくなった人たちのことを思うと負けられないと言っていてまだまだ復興は終わっていないと感じました。

かめ七呉服店では震災当時のリアルな様子を映像として見せていただきました。石巻の街中に何台も重なった車や普通では考えられない場所に船があったり津波が押し寄せる様子などその場にいた人の視点で見せてもらい津波の恐怖を知りました。

またかめ七呉服店はコミュニティカフェかめ七として古い雑誌などが沢山あり人によってはすごく楽しめる場所だと思いました。

最後に復興まちづくり交流館ではリチャードさんに話をきき海沿いに防波堤を作っていることや復興住宅が沢山作られていること何年か後の石巻の街を予想した模型などを見ました。だんだんと石巻の新しいまちづくりが進んでいて私たちの卒業後も石巻の復興はまだまだ続いていくんだと感じました。

15 日のワークショップではまち歩きで集めた情報をマップに整理し各班で発表しました。

他の人の話を聞いてマップに情報をまとめていく中で自分が思ったのは自分は今 4 年生で卒業したら地元の福島に帰るのですがまた何年か後に石巻に来て今回まち歩きした場所、皆が情報として出してくれた場所を見て石巻の復興を見ていきたいと感じました。

（高橋直紀）

B コース概要

◇JR 石巻駅前～ロマン海遊 21～えりこう～石巻信用金庫～復興まちづくり情報交流館

まず初めに行ったロマン海遊では、震災の実体験の話を聞きました。以前私は「ビヨンドトゥモロー」や「OECD 東北スクール」に参加して震災体験を何度か話す機会がありましたが、身近な地域に住んでいた人の震災体験を聞いたことがありませんでした。今回石巻地域の震災体験を聞いて共感できる話が何個もあり、なかでも自己判断で避難すべきということと正確な情報がないという言葉は私も共感できました。

次に行った子ども服店えりこうでは、当時小学一年生が書いた震災についての作文を読みました。私は、この小学生と同じ歳の弟を震災で亡くしました。この作文を読んで「弟だったらどのような作文を書いただろう」と思い少し胸が熱くなりました。小さな子供が震災についてどう思っているかという、知る機会が減多にないことがわかりました。震災について少しでも向き合う機会ができてとても良かったと思いました。

次の石巻信用金庫では、水産物の放射性物質の検査状況などの説明を聞きました。以前から水産物の放射性物質について知りたいと思っていたのでとても勉強になりました。

そして最後に行った復興まちづくり情報交流館ではこれからの石巻の復興が立体図で説明されていたのでこれなら他県から来た人にもわかりやすいと思いました。また、英語が話せる人がいたのでこれなら観光で訪れた外国人と海外に正しい情報を発信する機会が増えていいと思いました。

二日目のワークショップでは、他県から来た研究会の方々とともに、石巻市内の地図を用いてまち歩きで気づいたことを書き込む作業を行いました。地元の人が気づかない案が多く上がることがわかりました。

私は、まち歩き・ワークショップに参加して東日本大震災はマイナスなことだけではなくプラスなこともあるのではと思いました。それは、立町を歩いているときに道路や歩道が震災前より新しくそして近代的になっていることに気づきました。震災が起これなくても舗装する予定はあったかもしれませんが震災が舗装するきっかけとなったことが少しでもあるのではと思いました。また、私は震災で命の大切さ、感謝をする

気持ちを強く感じることができました。この二つは普通に暮らしては絶対学ぶことができないことだと思います。このように前向きにとらえるとすべてがマイナスなことではないということに気づかされた二日間でした。

(石山竜太)

「地面が見えるまで」が正解

大きな揺れから 40～45 分が過ぎた頃に大津波が来ました。浅野さんはその時職場である、ロマン海遊 21 にいたそうです。そして、水がどんどん押し寄せてきたそうです。

バスターミナルや線路に水たまった様子を写真で見せてもらいました。衝撃的でした。水がバスターミナル全体に広がっていて、まるで湖になっていました。外はそんな状態でしたので、浅野さんたちも外には出ることができずに三日間ロマン海遊に居たそうです。

外に行こうと思えば行けたそうですが、食べ物もないところに居たのは、水が来たせいで地面が見えなかったからだそうです。地面が見えなくても歩けると思っています。自分も話を聞きながら思いました。でも震災の時は津波が来たので、マンホールなどちゃんとはまっている保証がなかったのです。マンホールに落ちる可能性もあります。側溝のふたもとれていました。側溝に足が入って転んで、口に津波で来た水が入ったら、どうなるかわかりません。

こう考え、当日ロマン海遊で被災した人、ロマン海遊職員の人たちは、浅野さんが提案した、地面が見えるようになるまではここに居よう、という意見に従ったそうです。正しい判断だったと浅野さん自身も言っていました。たしかにむやみに行動して、二次災害を起こすよりも、安全が確保されているならその場にいる方がいいと思いました。

(菅野又祥樹)

同じ立場に立って

私は今回のまちあるきを通して、石巻の復興はまだ続いており、大勢の人、企業が復興実現のために必死に頑張っていることを体感出来ました。最後に訪れた「石巻復興まちづくり情報交流館」は市が管理し、震災の風化が進まないために町にとって非常に大切な施設だと思いました。石巻の過去、震災、現在、そして未来を見据えた展示物によって石巻を知ってもらうのに重要です。石巻信用金庫は地元経済の活性化のため融資など、町と共に復興することを目指しています。行政や地元銀行、企業、そして石巻市民がそれぞれ切磋琢磨していることに正直驚きました。私自身、石巻市民ですが市郊外の津波被害が一切無い内陸部に現在も住んでいるからなのか、近頃、復興がまだ終わっていないということを意識する機会が少なくなってきたと思います。同じ町に暮らしているにもかかわらず、被災から立ち直ることに共感がもてていなかった私自身は恥ずかしいことだと思いました。同市民としても今回出会って話しまで聞かせて頂くことが出来たことに感謝し、同じ立場に立って共に復興を成し遂げる手段をこれから真剣に考えていきます。

(岡崎臣希)

私自身も伝えていく側に

ワークショップに参加したことで、知らないうちに震災に対する風化が私自身の感情の中で起きていたことに気づかされました。確かに、直接震災を経験した人の中に、二度と震災の光景を思い出したくないと思う人は少なくはなく、年を重ねるごとに震災の記憶は薄れていくものです。戦争と同じように経験した人は少なくなり、やがていなくなります。その分、その時起きた出来事を伝えていく手段、機会も存在なくなります。震災から 5 年が経とうとしている現状を考えると、今はこのような状況になりつつあると思います。この状況を減らしていくために、震災による影響を直接受けた人間、影響を受けなくとも状況を知った人間が中心となって後世に続く人間に伝えていかなければならない。同時に私自身も伝えていく側になっていきたいと思いました。

(新堂貴陽)

人として大きく成長

日曜日に行ったワークショップでは、前日に行ったまちあるきで得た情報を改めて整理していくことが出来ました。また、グループでお互い感じたことや思ったことを述べることで、私と同じところを回ったのに感じ方にはこんなにも差があるのだなど、知ることができとても有意義な時間でした。私は今回の「まちあるき」、「ワークショップ」を通して、情報を得ただけではなく、人として大きく成長できた、とそう感じる事が出来ました。

(高橋塁)

被災者が支えあいを忘れがち

私たち被災者は震災の被害規模等を気にしがちになってしまっている。それは至極当然の事ではあるが、当時は近所の方と励ましあいながら、支えあいながら過ごしていた。私たちはその事を忘れがちになってしまっている。

(津田康平)

被災地に住む人のことを知って

今回の「まちあるき」とワークショップを通して、様々な人の話を見たり聞いたりして、話をしてくださった人たちの震災当時の思いやそれからの復興についての意気込みや熱意を感じることが出来たと思う。このような活動を通して被災地のこと、そこに住んでいる人たちのことを知っていただきたいと思います。

(菅原光一郎)

また石巻のまちを歩いてみたい

この 2 日間を通して、やはり体験することは大事であると思った。テレビや新聞などで見るとではなく、実際にその場に行き、その場を歩き、その場で話を聞くということで、感じるものや心に響くものが全く違うということが分かった。また機会があれば石巻のまちを歩いてみたい。

(箕田未来人)